

第3回羽曳野市教育改革審議会 会議録

開催日時 令和6年2月29日（火）午前10時00分～午後0時10分

開催場所 羽曳野市役所 別館3階 会議室

出席者 坂本会長・清水副会長・池上委員・坂井委員・西堀委員・安田委員・小林委員・新田委員・東委員

欠席者 なし

事務局 村田教育長・堂山教育監・森井学校教育部長・宮田都市計画部長・黒木学校教育部長理事・伊藤学校教育課長・寺元教育政策課長・川村建築指導課長・井上学校教育課参事・村尾学校教育課参事・酒谷教育政策課主幹

傍聴人 0名

内容 児童生徒数の減少に伴う問題や課題について

【会議内容】

《司会》

ただいまから、第3回羽曳野市教育改革審議会を開催いたします。

私は、羽野市教育委員会事務局学校教育部学校教育課の伊藤でございます。よろしくお願いいたします。審議に入るまでの進行役を勤めさせていただきます。

まずは、羽曳野市教育委員会 村田教育長からご挨拶いたします。

《村田教育長》

改めまして、皆さん、おはようございます。年度末のお忙しい中、第3回羽曳野市教育開会審議会にお集まりいただき、本当にありがとうございます。

本市の学校園におきましても、12月末からインフルエンザがかなり流行し、1月に入りコロナも加わりましたが、2月の中旬、下旬にかけてかなり収まってきました。一時は、学校休業もあり大変な時期もありました。

さて、3回目の審議会となりました。1回目、2回目は、議論と言うよりも羽曳野の状況を知って頂くことがメインでしたが、いよいよ今日から皆様の意見を頂戴しながら、本格的に

進めていきたいと思っています。いろいろな意見を出していただいて、良い方向に向かって行ければと思っていますので、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

《司会》

ありがとうございました。

続きまして、本審議会会長 坂本会長よりご挨拶を頂きたいと思います。

《坂本会長》

改めまして、皆さん、おはようございます。前回、非常に秋の良い天気の中で教育長を始め市教委の皆さんにご案内を頂いたおかげで、羽曳野市を本当に分かっていない私は、勉強させていただけたなと嬉しく思っています。今日からの審議、ちょっと記憶が飛んでいるところがあり、朝から市役所の玄関の前の地図を見ていましたが、やっぱり分かっていない所があるので、本日はPTAの方や羽曳野にご縁のある方から、羽曳野市のことを知っていないと分からないような意見を頂きながら、また、様々な専門的な見地から意見を述べさせて頂くため大学から複数のメンバーを集めて頂いておりますので、教育長からお話のあった通り実り豊かなご意見を頂けたらと思います。進行につきまして、どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

《司会》

坂本会長ありがとうございました。

さて、第1回目に委員の皆様からご提案いただきました資料を2点配布しておりますのでご確認ください。

まず、資料1としまして、羽曳野市の小学校校区図です。上が小学校校区図、2枚目が土地利用図、3枚目が浸水地域図、4枚目の大きい紙が令和11年までの児童数の予測表を校区とほぼ同じ配列で並べているものになっております。同じ地図を利用していますので見やすく工夫しております。資料2につきましては、各小学校区の育成協の成り立ちに関する資料です。本市では、小学校ごとに協議会がありますので、その成り立ちの資料でございます。これらの他に本日の会議資料といたしましては、審議会次第、配席表をお配りしております。お手元の資料に不足は、ございませんでしょうか。

それでは、審議に移りたいと思いますので、坂本会長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

《坂本会長》

はい。承知いたしました。

それでは改めまして、ただいまより第3回の審議を進めて参りたいと思います。ご協力どうぞよろしくお願いいたします。まずご報告です。

本日、全委員にご出席をいただきまして、委員総数の2分の1を超えていますので、羽曳野市教育改革審議会条例第6条第2項の規定に基づき、この会議が有効に成立しております事をまずもってご報告申し上げます。それから本会議の署名につきましては、私と東委員にお願いしたいのですが、よろしいでしょうか。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今、事務局の方からこの校区図を改めてもらい、自分の頭の中でどの道をどう通ったのか、思い出しながら羽曳が丘ぐらいから危なくなってきたというのが正直なところです。非常に分かりやすい資料をご準備いただいておりますので、様々なご意見をいただく際に参照させていただきたいと思います。

前は、市内の様子が概ねわかったような気はしますが、審議会は、来年度も引き続き開催されますので、頂いた意見の中でもう1回あそこは、見てみようと言うことになれば、事務局に無理を言って、連れていってもらってということも可能性としてはあると思っています。

今回の議論を進めるにあたっての軸といいますか、テーマについて事務局からご説明いただいた上、皆様からご意見を賜りたいと思いますが、それでよろしいでしょうか。

では、今日のご議論についてご説明ください。

《黒木理事》

おはようございます。事務局、学校教育部の黒木です。どうぞよろしくお願いいたします。着座にて失礼いたします。

前回の市内見学は、皆さんには本当に長い時間になり、本当に申し訳なかったと思っています。東の方から西の方まで全ての校区を見て頂きました。皆さんも感じられたと思うのですが、東の方は、非常に校区が広いという状態だったと思います。

はびきの埴生学園を通り過ぎて、西の方に入っていくと住宅地が密集していて、校区がどんどん狭くなっている印象を受けたと思います。そういった特徴のあるこの羽曳野市ですが、今回の議論の内容といたしましては、現在児童数、生徒数が減少していている。そして、先日ニュースでもあったように、少子化が本当にどんどん進んでいっている現状の中で、今回は、前回までに提示いたしました資料で児童生徒数が減少していますが、そういったことを受けて減ることによってどんな問題が学校に起こって来るのか。子ども達にどんな影響が出てくるのか。というところを話し合っていたきたいなと思っています。

そこで、課題や問題点を明らかにした上で、文部科学省のガイドラインもありますので、そちらも参照しながら今後のことについて、いろいろ自由な意見をいただけたらなというふうに考えています。まずは、児童生徒数の検証から予想される問題点、課題について議論していただければなと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

《坂本会長》

ご説明ありがとうございました。

趣旨は、よく分かりましたが、それに入る前に私の知識を整理したいので教えてください。
今、理事から東側と西側とありましたが、この資料1で東がどの範囲で、西はどの範囲か教えて下さい。

《黒木理事》

分かりました。思い出す意味を込めて説明いたします。

まず、東側の方については、駒ヶ谷小学校区、古市小学校区、古市南小学校区、西浦東小学校区、西浦小学校区、白鳥小学校区ぐらいまでが、おそらく東側っていうふうに私は思っています。

西側と言われているのが、高鷲北小学校区、高鷲小学校区、恵我之荘小学校区、高鷲南小学校区、そして、はびきの埴生学園の校区です。

ここが非常に地図上で見てもわかると思いますが、校区が非常に狭くなっています。

そして、丹比小学校区、埴生南小学校区、羽曳が丘小学校区が真ん中あたり、ここが中央の部分になっています。

《坂本会長》

わかりました。ありがとうございます。

今日、事務局の方から論議のテーマとして与えられた児童生徒数の減少から予想される問題点や課題っていうと直接関わることではないのかもしれませんが、羽曳野市の現状を踏まえつつ、ご意見をいただきたいと思います。

それでは、どこから切り込んでいくか。どなたにご意見いただくか。という事ですけれども、その議論のテーマが子どもの減少という事で実際に日々、小・中学校で子ども達と接している校長先生にまずはご意見をいただいた上で、保護者の立場からそして教育と違う観点での立場からというあたりで議論を進めていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、お願いしてよろしいでしょうか。

《新田委員》

西浦東小学校校長の新田です。おはようございます。着座にて失礼します。

資料1の地図でいいましたら、西浦東は、東側の真ん中の下ぐらいにある校区になります。私は、毎朝歩いたり自転車で遠いところまで行って見守りの方と一緒に立ったりすることがあります。この地図でいうと南になりますが、校区の端まで歩くと富田林市の喜志小学校の子ども達とすれ違います。北側のとがった部分ですが、ここを歩きましたら西浦小学校があり、さらに北に行くと西浦東小学校区があり、古市南小学校の子ども達とすれ違ったり、そんなような位置関係になります。今、坂本会長より現状についてということで、私見の部分であったり、学校アンケートや保護者の声を聞いたりと今までの経験値の中でお伝えできればと思います。

小学校そのものの役割として一番大事なのは、子ども達の健やかな成長を育む場所であると思います。その成長には、学習、成績といった学力の成長もあれば、体や心の成長もあると考えています。二次的ですが地域のコミュニティの連携を生み出す役割も担っていると思っています。西浦東小学校は、この地域の学校として、すごく親しまれて小学校に児童が通う保護者、関わる地域の方は、同じ地域として連携を持っています。西浦東小学校の行事や活動には、地域の方に支えられたものも多く、地域で児童を見守っていこうという意識を持った方が多くいらっしゃるのも事実です。西浦東小学校は、小規模校と言われています。全学年単学級で支援学級が3学級あり合計9学級です。西浦東小学校の現状と課題を幾つか紹介できたらと思います。

一番大きな課題は、子どもの数が少ない事です。そこからの課題が一番大きいかなと思います。まず、人数が少ないので交友関係が限定されます。決まったお友達といことが多くなります。100人の学年とうちみたいに10人や20人の学年では、多様な考えに触れる機会が子ども達に少なくなりがちかなと思います。

あと、良い学級のあり方を知らないかな。これは、どういうことかと言いますと2クラス、3クラス、4クラスとあれば勝ち負けではないですが隣のクラスは、挨拶を頑張っているよ。自分のクラスはどうか。3組は、整理整頓がすごく進んでいるよね。自分たちも真似してみようか。学級比較が出来ないことや良い意味での切磋琢磨が出来ない。そういう教育活動ができない部分もあるかなと思います。それと人間関係に揉まれない。競争の機会が少なく、中学校進学時にギャップを感じる。峰塚中学校に進学して、単学級だったのが7クラス、8クラスになる。単学級で子ども達が慣れているので、あの子がこう言ったから、ちょっとここはもう引いておこうか。あの子がこう言ったから補助してあげるから、ちょっとここは譲ってあげようか。そういう関係で6年間を過ごしていますが、いざ中学に入ると違う人間関係の中で、すごくギャップを感じて、子ども達が学校に行きづらくなったり、不登校傾向になったりと言うような事は聞きます。

あと、児童同士の関係が崩れたときに逃げ場がありません。クラス替えという決定的なカードがないので、いざ崩れたときには困るかなと思います。

あと男子女子っていう括りは、今はジェンダーの考え方からないですが、例えば、2年生は、男子13人、女子は、6人。3年生は、男子16人、女子9人。4年生は、男子15人、女子7人です。これは、どうしようもないんですけども、バランス的にはちょっと偏りがあるかなって感じがします。

あと、日々の学校生活の中でも決まったメンバーでずっと過ごしているので、新しい価値感であったり、新たに社会性や協調性を伸ばしていく機会が同じメンバーなので、その機会が少ないかなと思います。

あと、教科と学習指導していましたが、あの子は、体育がすごく得意だよ。社会は、あの子に聞いといたらばっちりだねっていう事で、子ども達の中で得手不得手が固定観念的に出来ていて、その子たちの考えに全体が影響したり、他の学校では、ないようなことが出てき

ているかなと思っています。

あと、10 数名から 20 名、学年でそれだけの人数しかいませんので、子ども達がいつも明るく元気に過ごせるといいのですが、いろいろ背負って来ていると子ども達もいるので、問題行動が起きた時に、1 人の子が与える影響っていうのは、他校に比べかなり大きいと感じています。

これから修学旅行や林間学校の宿泊行事の話しをしていますが、バス代がとても高いです。購入するものに関しても、10 人で購入するのと 100 人で購入するのでは、すごくお金が違ってきて、同じ場所に行って経験をするのに活動内容を省略するのか。それとも場所を変えるのか。そういった影響が凄く出てきています。今まで、4 年生は 3 学期に漁港に行って工場見学ができていましたが、計画はしていましたが、冬場になってもバス代が上がり続け、1 人当たり 4,500 円がバスだけでかかるという事で、保護者の皆さんには、何とか抑えようと努力しましたが、違う形で実施することを伝えました。こういう事が今後、沢山出てくるかなと思っています。

保護者に関わる部分では、保護者の方の中でも色々な考えをお持ちの方が沢山おられますが、私も 10 年以上前に西浦東小学校で担任をしていた時期がありましたが、その時、保護者の方が、学校の管理職にクラス替えがないなら、せめて担任を変えてほしい。と言いに来たと聞きました。悪い意味で言っているのではなくて、そういう刺激を求められています。単学級なのでなかなか得られないです。その刺激を求める中でも子どもに声掛けをして頂いていますが、6 年間同じメンバーなので、子ども達の順位がある程度固定されてくる。その中で保護者の方は、子どもが意欲を持ってやってくれない等の悩みを持っておられます。そういうこともあります。

あとは、同じですが行事等の 1 人当たりの費用が、どんどんどんどん上がっています。

次の春には、教材費や積立金、そういったものも値上げしないといけないかなと感じ校内では情報共有しています。

それから、PTA 活動ですが家庭数が少ないために、活躍していただくメンバーが限られているので、2 年に 1 回は色々な事が回ってきます。他校では、卒業するまでに 1 回、何かの役を受けていただいたらオッケーとなるとところが、1 年やったら次の 1 年は、当たらないけどその次は役割が回ってきます。

教職員に関わっては、今どんどん若い教職経験の年数の浅い先生方が来て来ていますが、6 年間、同じ人間関係で来ている子ども達のところに若い先生が入った時に先生の指導力を子ども達の人間関係の方が超えてしまっている場合があります。あの子のいう事は聞かないかなとか。そういう事で若い先生が悩まれたりしています。

あと、教職員の人数です。児童数が少なければ、教職員の数も少なくなるのが当然ですが、学校でやるべき仕事の数っていうのは、小さくても大きくても一緒です。大きい学校は、50 人の先生で分担ができます。本校であれば、学校の仕事を 15 人で分担しなければならないです。そうすると 1 人の先生が抱える負担がかなり大きいと思います。

宿泊行事では、例えば、修学旅行に行くとなった時、他校では1組の先生は、旅行会社との交渉をし、2組の先生は、子どもと一緒にしおりの作成を行う。3組の先生は、保護者説明会の資料の準備となりますが、本校であれば、1人の担任が全部しなければいけない。交渉から何から何まで。そういったこともあるかなと思います。

あと、子どもが減るってことは教職員も減ります。そうすると子ども達の活動の中で、委員会やクラブ活動がありますが、その数も統合したり減らさなければいけない状況もあります。

あとは、体育や音楽、集団で行う合奏や演奏というのが果たして、10数名になった時にどれだけの事ができるか。そういった子ども達の活動にも制約が出てくるかなと思います。

あと、そうですね。複数のクラスがあれば、先生方が結構情報共有して、授業づくりとか指導の方法なんかも意見交換が出来ますが、本校であれば、単学級なので自分1人でやらなければいけないという事があります。

あと、地域との関わりについては、教職員の全体数が少ないので、地域行事への教職員の参加は、数的にも少ないかなと思います。

あと、少ない家庭数の中からPTAの役員を選出しないといけないので、地域と連携する人がすごく限られ、地域コミュニティとしての力が弱まっていかないかなと凄く危惧しています。家庭数が少ないので、校区育成協や福祉委員会とか核になっている人が限られていて、円滑な世代交代もなかなか難しいと感じています。逆に小学校があるから地域からの子どもの流出が防げていると思っています。今、140人前後の人数ですが人数の減り方を見れば、学校があるからこれで抑えられているのかなと思ったりもします。

あとは、私が心配することじゃないかもしれませんが、大規模と小規模の学校で学校施設を維持ための費用は、ほぼほぼ同じだと思います。本校の1人当たりにかかっている費用が凄く高いかなと思っています。担当課の方からも備品の修繕や施設の修繕をすごく好意的にやって頂いていますが、31年が経過した学校なので、これからも傷んでいくことが考えられますので、西浦東にかかるランニングコストは、そういったところもすごく懸念されるかなと思います。ちょっと思いついたところを伝えさせていただきました。

私からは以上です。何かありましたら聞いていただけたらと思います。

《坂本会長》

ありがとうございました。私も中学校、小学校の教員経験があります。

今の話し聞いていて、実態も含めて、やっぱりそうだよねっていうのを非常に強く感じつつ、保護者の立場で聞いたら、「えっそうなんちょっと待ってよ」みたいな気持ちにもなります。校長先生のご苦勞の中で、課題をたくさん挙げて頂きましたが、締めくくりの方で市教委のヒアリングに対して、ちょっと物言いたいみたいに。このチャンスに言ってるのかなと思います。ながら、それに強い共感を覚えた私でありました。

今、新田校長先生のお話の中で、単学級っていうことが出てきましたが一応なんです、法

律的には、小学校も中学校も適正な規模というのは、このぐらいということが決まっているというか定めがあって、それは、小中ともに 12 から 18 学級です。だからイメージで言うと小学校は、最低各学年 2 クラスです。3 クラスぐらいが適正だというふうに法律では書かれています。罰則規定は、何もないです。中学校で言うと 4 クラスから 6 クラスです。ところが、これを守るのは、なかなかここ何十年かの中では厳しいです。ただ私たち世代は、クラス数は多かったです。私は、中学校の時 1 学年 15 学級でした。それで運動会は、学年ごとでしか出来ませんでした。全校集会もほとんどなかったです。体育館ぐらいしか 1 学年まとめて入れる場所がない。だから、それもいいか悪いかわからないですが、かなり時間の経過、流れによって学校というものも認識を変えて行かなければいけないと思います。

新田校長先生から非常にリアルで貴重なご意見とかご紹介いただいたんで、ぜひこの後、東校長先生のお話も聞いた上で、ぶっちゃけ話で保護者とか地域の立場で質問してもらうのが大事なと思いますので、そういうふうに進めて参りたいと思います。

では、お待たせしました。東校長先生、よろしいでしょうか。

《東委員》

失礼します。はびきの埴生学園の東と申します。着座にて失礼いたします。先ほどの新田校長先生のお話と重複する部分もあると思います。そこは、ちょっと割愛しながらお話させていただきます。まず、本校について簡単に説明をさせていただきます。

本校は、義務教育学校という学校種になります。従来の小学校、中学校、新たにできた学校種で義務教育学校と言いますが、前期課程と後期課程というふうに分かれます。

前期課程というのは従来の小学校、後期課程というのは従来の中学校部分で、生い立ちというか歴史としましては、もともと先ほど地図にありました、はびきの埴生学園の校区にあった埴生小学校と羽曳野中学校です。1 小 1 中の校区でしたが、この二つの学校が平成 30 年に統合されて、新しくはびきの埴生学園として開校し、今 6 年目を迎えております。

義務教育学校は、本市で本校だけです。また、南河内でも本校だけです。人数は、学級数で言いますと 1 年生から 9 年生。本校は、中学校 1 年生 2 年生 3 年生を 7 年生 8 年生 9 年生といい、1 年生から 9 年生まで各学年 2 クラスです。前期課程の小学校部分は合計 12 クラス、後期課程部分は 6 クラスです。先ほどの坂本会長の話から言うと文科省の基準からはちょっと少ないということになります。

あと支援学級も含めて、児童生徒数で言いますと前期課程の児童数が約 320 人です。後期課程が約 150 人、合計で約 470 人規模の学校で小さな学校になっています。私の方では、小規模校の課題、デメリットという辺りを義務教育学校の立場からお話しさせていただきますが、大体は、先ほどの新田校長のお話と同じようになります。まず、教員への依存がやはり高くなるというか強まる傾向があると思います。やはり子どもと教員、子どもが教員に対してもそうですし、子ども達同士もそうですが非常に距離が近い近すぎると感じています。結局こういった子ども達が卒業後にその距離感で戸惑って苦勞するというのは、埴生小学校、羽曳野

中学校時代からあったことで、そういったことが課題の一つかなというふうに思っています。

先ほどの話と重複しますが、学校行事の種類がやはり限られて、人数的な問題で、学校の活性化がやはり工夫しないと中々うまくいかないというところがあります。例えば、本校は、義務教育学校という学校種ですので、運動会を元々は小学校、中学校で別々に行っていましたが本校になって、当然学校は1つなので1年生から一斉にやっています。

本市の中学校は、統一して9月の最終の土曜日ぐらいにやっていますが、その時期は、まだ暑いので、中学生は、体力があって大丈夫ですが、小学校低学年は、体力的にしんどく、暑いから時期もちょっと考えてくれないか、という保護者の方の声も当然いただいています。ただ、後期課程は、そのあとの進路の日程とかを考えていきますとやはり日程を動かすのは大変で時間を短縮するしかありません。そうすると競技が減るので、もうちょっと競技を増やして欲しいと言われます。当然、ご意見を色々頂きますが、柔軟性がなかなか取りにくいなっているのは正直あります。

続いて、学習や進路選択する際の模範となる生徒の像というか、それに触れる機会が少なくなるかなと思っています。あの先輩、ああいう進路に行ってああいう所でああいう頑張っているというモデルケースが当然、人数が少ないので少なくなっています。そういったこともありえるかなと思っています。

やはり一番は、中学校の部活動ですね。部活動の選択肢が限られます。本校は、後期課程の生徒数が大体、先ほど言いました150人です。そこに5年生6年生も日を決めて参加できるようにしています。開設しているクラブは、グラウンドで野球、陸上、女子ソフトテニスです。この3つです。体育館で男子バスケット、女子バレー、文化系のクラブとして吹奏楽と家庭科的な活動を行うVS部、この7クラブになっています。元から少ない子ども達が分散しますので、当然、各クラブの規模は小さく年によっては、部員が2・3人で来年は、どうなるのかという話はたびたび出ているのが現状になります。

続いて、先ほどの西浦東小学校と同じですが生徒は、1年生から9年生までほぼほぼ同じ集団で来ますので、もう人間関係が固定化しているのも、やはり子ども同士の総合の評価っていかね。この子は、こんな子やと固まってきてしまって、一応2クラスなのでクラス替えは出来ませんが、人数が少ないので限定的になります。そういったところは、先ほどの小学校と同じ課題があると思います。先ほどの学習や進路選択の模範となる生徒ともちょっと関係があるかも知れませんが、距離が近いといったところもそうなんです、やはり進学の際に西浦東小学校は峰塚中学校に行った時に、大集団になってというのがあったと言いましたが、本校の場合は、高校へ行った時やはり規模が全然違いますので、そこで大きな集団に適用するのに困難をきたして、よく卒業生が来て愚痴を言うというか「どうしたらいいの」と馴染めないと言う子ども達の数が比較的に多いと感じております。やはり思春期は、いろんなことを学ぶ時期で人と関わる範囲も広い方が当然、子どもにとってはいいのかなって個人的には思っています。以上が学習面、生活面での子どもの立場から見た課題といい

ますか気になる点であります。

続いて学校側というか、学校運営面からの視点で少し課題のお話をさせていただきます。

先ほどの新田校長先生がお話されたことと大体同じです。やはりバスの話があります。1人当たりの単価が小規模校は、もう本当にすごく負担が大きくなります。修学旅行や特に宿泊とかに関する経費、保護者負担の割合が非常に大きくなっています。

本校も来年度、学校徴収金と言われる積立金や教材費を増額しなければ、もう何もできないなということで、今議論して保護者の方やPTAの方に説明をしている最中であります。

これも先ほど、新田校長先生もおっしゃっていましたが、学年行事なんかも特に前期課程になります。1人で全てやってしまわないといけないという先生の負担です。特に新任の先生なんかは、そこで苦労しているのは事実です。その学級数によって教職員の数っていうのが法律で決まりますので、規模が小さくなると教職員の数も当然減ってきます。そうすると少ない人数で学校運営をしていくっていうことになりますので、教育活動はチームでやらなければならないのですが、少なくなればなるほど個人の力量に左右されてしまい、その教育活動は、人事異動に過度に左右されたりすることがあって、学校経営と運営が不安定になりやすい面は、小規模校はあるかなっていうふうには思っています。

あとは、もう教職員定数で言いますと本校後期課程は、各2クラスの6学級プラス支援学級が3学級ありますが、そこに配置される教職員の数は、中学校で教える教科がありますが数が足りません。だから本校の後期課程は、音楽の先生と技術の先生はいません。どうしているのかというと本校は、前期課程の小学部分に音楽専科という音楽だけ教えてくれている先生が配置されています。その先生に中学校部分の後期課程の音楽を全部見てもらっています。技術の方は、非常勤の先生に担当してもらっています。結局、教科ごとの専任科目の教職員の人数が足りないという課題が出てきます。

あとは、さっきの部活動です。当然、部活の数が少ない。子どもの数が少ないということもありますが教員の数が少ないので、指導者の確保が毎年、困難になっております。校長の立場としては、やってよってというお願いです。自分がこれやったらやろうという種目と違ったり、その部活がなかったりします。例えば、サッカーを経験している教員は、たくさんいるのにサッカー部がない。そんなことは多々あります。

あとは、これは直接的に関係ないかもわかりませんが、保健体育です。学習指導要領が変わって男女共修で原則しましょうということで、昔は、男子と女子に分かれて行っていましたが、今は共修が原則となっております。実際には、男女別々でやっておられる学校が結構あると聞いていますが、本校は男女共修でやっています。例えば、1クラスの生徒数が20人というケースで、男女を分けてしまうと10人ということになってしまいます。学習の制限が生じる可能性もあります。ただ本校は、先ほど言いましたように保障するために学習指導要領の理念に基づいて、2クラスしかないですが、合同男女共修で体育を実施しております。

メモ的な話ばかりになりましたが、大体は小学校のことと同じで、あと先ほど新田校長先

生がおっしゃった保護者の方に関することであるとか、地域に関することでもほぼ同じ課題になるかと思います。やはり、教科指導のことであるとか、部活動のこと。それと義務教育終わって、高等学校に行ったとき、そこで戸惑う子どもが多いという事。それ以外は、小学校とほぼほぼ同じ課題かなっていうふうに私自身は感じております。

以上でございます。

《坂本会長》

ありがとうございました。

やはり市教委さんには、耳の痛いお話がたくさんあるとはいえ、外から見ると小じんまりしてると何もかもうまくいっているように見えないこともないんですが、このことはどの学校でも起こっていることであり、もともと少ないところは特に起こっていることであるというような認識で受け止めるべきなのかなっていうふうに切実なお話をお伺いして、保護者の方にとってはどうなのでしょうね。教える教科の先生がいまいませんけど、どうしたらいいだろうってなると思います。ただ、これは、校長先生が頑張ってどうこうなるという問題ではないというところもありますし、今の公教育が抱える難しさも含めて、それが子ども達が減ってきて規模が小さくなれば、リアルになってくるっていうあたりのところをお話いただけたと思います。そうするとやっぱりその人っていうのを見ると子ども、教員、地域の方っていうふうになってくるし、また、さらに教育内容というふうに関わってくるし、今のお話の小規模校でなかなか難しい面がたくさんあるというお話が中心でしたが、逆に大規模を作ったらいいやんって言われると、この地図の中で小学校が3つぐらいになったら、別の問題が一杯出てきます。どうやって子どもを通わせるみたいな話も出てきます。今、校長先生お2人がご説明いただいたところは当然のことながら、子どもの数が減るっていうことに対して起こる課題をご紹介いただけたと思います。

さっきちょっと施設の話も出てたんですけど、その人の部分、内容の部分、施設の部分で、もう一つ言うと、ちょっとこれ参考までに聞かしていただけたらと思っておりますが、いわゆる学校維持のランニングコストっていうんですかね。その辺りの情報を少しでも頂けたらと思うのですがいかがでしょうか。すいません突然こんなこと言って。

《寺元課長》

教育政策課の寺元と申します。。

学校のランニングコストですが、お答えが難しいのですが、令和4年度の決算ベースで、1校あたりおおよそですが、約2千万から3千万の運営経費はかかっているかと、大規模小規模校にかかわらず一定の運営費が必要です。このほかにソフト面や臨時的な工事費、修繕費もかかってきますので、実質的にはもっと膨らんだ大きな経費です。あくまでも、申し上げた数字はご参考までにお問い合わせいたします。以上です。

《坂本会長》

こういう数字は会議の目的を考えたときに議論をする上では、非常に大事だと思います。なんか校長先生のお話を全部裏付ける意味でもこの数字は大事で、先ほど事務局の方からご説明があった通り、私が羽曳野市のことを補足することはできないですが、今の説明の金額には先生の給料は、入ってないんですよ。また、大規模改修も入っていない。その人事の部分については、またちょっと後で私の方からもご紹介をさせていただこうと思っています。さて、いろいろ困ったことがあるっていうことであれなんです、ちょっとだけ揺り戻させていただいていいでしょうか。

《坂本会長》

もう1回だけ校長先生に時間制限で一言だけでお願いしたい事があります。お2人の校長先生の赤裸々なご意見を聞いていると、なんか悪いことばかり、難しいことばかり、しんどいことばかり聞こえて来ました。ここで議論は、外れるかもしれませんが、規模の小さい学校の良いところをちょっとだけ紹介してもらっていいでしょうか。突然、振ったんで申し訳ないです。

《新田委員》

小さいがゆえに先生方のコミュニケーションは、断然、図りやすいと思います。50人の先生と毎日、しゃべろうと思ったらかなり時間を確保しなければいけないですけど、本校であれば10数名なので、もうほぼ確実に全員としゃべれるからコミュニケーションは、図れているかなと思っています。

《坂本会長》

それは、子ども達にどんな良い影響を与えます。

《新田委員》

そうですね、特に若い先生は、頑張ってくださいっていますが、ちょっと周りが見えない時などは、私の教員経験からこちょっと見たらいいと思うよっていうアドバイスをすれば、その通り動いてくれます。人数が少ないので、教室を1日に4回も5回も全て回れます。もう、子ども達の名前と顔が一致します。よく学校に来られている保護者の方も名前と顔が一致します。そこでの子どもの対応、保護者対応というのは、大規模校に比べたら断然いいかなと思います。

《坂本会長》

ありがとうございます。東校長先生、お願いできますか。

《東委員》

良いところは、いろいろとありますが学習面であれば、一人一人が活躍できる場が多いと思います。学びの場で、リーダーを務める機会が何回もつくり出せるとか、そういったところもあります。施設面で言いますといろんな特別教室を自由に使える。どんどん使えるというようなところもあると思います。

先ほど、新田先生の話にもありましたけど、小規模であるがゆえに学校職員がほとんどの子どもの顔と名前が一致して、その情報を共有していろんな保護者の方とこの先生は、担任ではないけど一緒に話を聞くよとか、そういう活動は非常にやり易いです。そういった寄り添った指導は、小規模校ならではかなというふうには思っています。

あとは、本校もやっていますが小規模校でどう集団を作るかっていうと、例えば縦割り学年交流ですね。こういったところで、別の子ども達の交流というか活動の幅が広がっていくのかなと思っております。

《坂本会長》

ありがとうございます。

先ほど事務局の方の説明で、規模の小さい学校でも、維持するには一定運営にお金がかかるとのこと、しかし、こんな良いところもあるっていうあたりのところも、あくまでも教育改革審議会っていうテーマを考えた時、両側面で物を考えなければと思い、両校長先生にもう一度、ご発言をいただいたところです。さて、きっと保護者の方は、いろんなことを思いはったやろうなと思うんですが、質問でも感想でもご意見でもってということで、どうでしょうか。安田委員、小林委員の方から何かお話いただければと思うのですが、よろしいですか。

《安田委員》

高鷲北小学校 PTA 会長の安田と申します。よろしくお願いします。

校長先生のお話を聞いてなんですが、まず一番感じたことが大規模、小規模だからといって子どもの学びを変えてはいけないとつくづく感じました。例えば、バス代。予算は、問題だと思います。私達 PTA、保護者も各家庭でお金の事情って変わってくると思いますが、子どもにとっては、本当に変えてはいけないことだと思いますので、そこは本当に難しいところだと思うんですけど、市、学校、PTA 一丸となって、変えてはならない方向で校長先生や先生方も予算を気にせず、高くなる場所ばかりに着目せず、一定のベースというのがあると思いますので、人数が減ってきたから来年はちょっと減らさないといけないとかではなくて、じゃあどうやって予算を作ろうっていう事を考えて頂けたらなと感じました。

部活動のことですが、私の娘が今、小学校 6 年で来年に中学校に上がります。その中学校で野球部がもともとありましたが、来年度からは野球部はもう募集しませんということになっています。大阪府の PTA では、地域の方をお願いするという事で、今進めていまして、今

後羽曳野市もやっていくのかなとは感じていますが、本当に子ども達をメインに考えていただいた政策を私たちも考えていけないようになって思っています。

あとはですね、高鷺北小学校も今年 269 人っていう児童数で小規模にはなっていますが、うちの娘は本当に楽しく帰ってきていますので、大規模、小規模というのは関係ないかなあと思っています。私自身もちょっと田舎の方で 1 クラス 24 人の学校で過ごしてきましたので、本当にその子らとはいまだにつき合いもあります。子ども達に非認知能力を学ばせないといけない時代なんかなって特に感じています。そこは、もう本当に先生方の力だと思っています。非認知能力があれば、こういった人は一杯いますけども、ある程度対応できる能力が小さい時からついていけば、対応もできるんじゃないかなって思っています。

1 クラスだからいい面も一杯ありましたし、クラス替えが出来ないということもありますけど、でもやっぱり人間関係って何が起こるか本当にわからないと思います。

今、教職員の方が少ない。音楽の先生もいないっていうことであれば、子ども達の学びにも影響があるとすごく感じました。そこは、国、大阪府、羽曳野市が一丸となって、ぜひ変えていっていただけたらなと思います。

でもうちの娘、息子も今、年長で次に小学校上がりますが、ドキドキしています。中学校に上がるのも小学校に上がるのも大丈夫かなって、不安ですが私たちも見守っていくしかないので、良い教育を受けさせて欲しいなっていうのが実感です。

あとはプールの事です。うちの学校は、もう使えないということで、多額のお金がかかるので、直すことも多分難しいかなと感じています。プールの授業数が減っていくと思うので、そういう事も含めて、昔の建物なので劣化とかは絶対してきます。当然、スイミングスクールに行かすのか。やはりある程度、私たちが受けた教育を子ども達にしていってあげて頂けたらなと思います。ありがとうございました。

《坂本会長》

ありがとうございました。

子どもさんが元気に学校や幼稚園に行っているというのを聞くだけでも、ほっとしつつ、それをずっと続けようと思うと人も物もお金もかかるという問題と悩ましいところですね。ただ今回、来年度末の答申を作っていくにあたって、やはり子どものことを一番大事に考えなあかんねっていう視点は絶対に外したらあかんと思います。

ただ、同時に羽曳野市として、まちづくりをどうするかっていうあたりも、これもほっといたら、町がちゃんといってなかったら、子どもはもっと大変になるというあたりのところ、今日この後学識のそういう点での見地からもご意見いただけたらと思います。

小林委員いかがですか。

《小林委員》

高鷺南幼稚園 PTA 会長を務めています。小林と申します。座って失礼します。

我が家は、小3の息子と年長の息子と1歳の息子がいて、今のお話を聞いて、1歳の息子が小学校に上がるころは、本当にどんな状況になっているのかなってというのが今の感想です。年長の息子が結構小学校に対して不安を抱えていて、すごく幼稚園が楽しくて、幼稚園は現状、1クラスなので3年間ずっと同じクラスで、友達とすごく仲良くて、先生とも離れたくないって、毎晩泣くぐらい結構不安を抱えていて、小学校に上がったときのギャップが大きいから人数が少ない方が先生たちの目が届くのかなってという、親の目線ではちょっと思っていたのですが、今のお話聞くと中学校に上がったときのギャップも大きいと聞いて、難しいなっていうのが感想です。少ないからすごく良いっていう面だけじゃないんだなんて思って、依存があるとか先生たちとの子ども達との相性もあるとか、いろんな問題があるんだなって思いました。人数が少ないから、出来ることもあるのかなって思っています。幼稚園と小学校の交流をもうちょっと増やしてもらえたら、きっと、息子のような不安も少しは減るかなと思ったりします。授業があるので難しいと思いますが、小学校に遊びに行くと、もっと小学校の子ども達と遊ぶとか、先生たちと一緒に遊ぶとなると、もっと小学校への楽しみも増えるのかなと思いました。減少の話とあんまり関係ないと思いますが。中学校の部活の選択肢が少ないというのも気になっていて、まだ、小3ですが中学校の部活は、何に入ったらいいのかなと今から気にしていて、ちょっと早いようなと思いながら聞いてはいますが、親としては、帰宅部は余り良いイメージがないから何かには入らないとダメだよねと話したりしています。でも、僕はボールとかは余り得意ではないし、陸上もあんまり得意ではないという話をしています。そういう子たちも絶対に入らないといけないとなると選択肢が少ないとどうなるのかな。子ども達も負担だろうし、先生方も部活を増やすと負担が大きくなるので、いろんな面で考えないといけないと思って聞いていました。高鷲南小学校は中規模の小学校になるので、子どもの学年と3年生が2クラスですが、1クラスが30数名で息子は、本当に楽しいといった感じで文句も言いますが、いつも楽しかったよって言って帰って来るので、きっと学校は、すごく楽しいんだろうなと思っています。でも、それがすごく多い学校だからとか少ない学校だからとかあんまり関係ないとは思いますが、子ども達が楽しんで行っているのが凄く一番だなと思って話を聞いていました。ありがとうございます。

《坂本会長》

ありがとうございました。

あの直接この審議とは繋がらない部分なんですけど、ご指摘いただいた幼小連携ってこれ、国を挙げた大きな問題で、どうしたらうまく連携するかっていうことも非常に大事な事としてとらえている動きがあります。小学校上がった時、中学校上がった時っていう必要な段差っていう考え方もでき、いわゆる小1プロブレム、中1プロブレムとかっていうのは、もう近年ずっとこれをどうやってスムーズにしていくかと言うのは課題です。先ほど東校長先生が少し紹介して頂いた義務教育学校は義務教育学校の考え方、制度の中に小中一貫で

スムーズに流れるよっていうあたりから、義務教育学校だけでもない、大阪府内では小中一貫校は10校を超えているというふうな状況です。よく保護者の方が心配される。機嫌よく毎日楽しい言うて行ってくれるのが一番いいねんっていう。ほんまの意味の一番大事な本音の部分っていうあたりは、先ほどの安田委員の話としっかり繋がる場所なのかなというふうに思って、聞かせていただいております。ありがとうございました。

さて、今、現状を紹介していただいた校長先生方からのご紹介や意見、そしてそれをPTAとか、お母さん、お父さんの立場で考えた様々な思いなどを聞いていただきながらですね、どうでしょう。これも質問でもコメントでも、そしてそれぞれのご専門の見地からでも。今日は、ちょっと学校教育っていうことに割とシフトしていたので、教員のご経験があり校長先生のご経験をお持ちの坂井委員と池上委員にお話を伺いたした上で、できたら西堀委員に今までの話を聞きながらご専門の観点からの何か意見をいただけるとありがたいと思います。では、坂井委員よろしいでしょうか。

《坂井委員》

四天王寺大学の坂井です。よろしくお願いします。

私は今、大学に籍を置かせて頂いていますが、もともとは府立高校の教員です。40年近く府立高校に勤めていました。今の小中学校の子どもの数が減ってきているというのは、同じことが高校にも言えて、私が採用された頃は12クラスでした。1クラス48人という時代であります。今は、40人で大体6から7クラスです。しかも府立高校については、ご存知かと思いますが、教育庁の方が改変に該当する学校のルールづくりをしているので今かなり減っています。実際、私も今、府立高校に関わっています。学校運営協議会の委員として、何校か参加させてもらっています。その中の1校が、廃校の対象です。間もなく、次の入試がないので、1年生が入ってこない。だから2・3年生という年がやってきて、3年生だけになって閉校となります。こういうふうに流れて行きます。本来は募集人数からいうと5か6クラスだと思います。定員割れが続いているので、3クラスとなっています。となると、教員定数もかなり少ないです。そうすると先生方と一緒に研究授業とか、今までであれば時間が空いてる時にみんなで見に行くというようなことができていましたが全くできない。要するに職員室に先生がいないんですよ。いろんな仕事があって、高校で閉校に向かうような学校は、色々なことがあって、いろんな所に先生を配置しないといけないので、職員室に人がいない。誰かいないと問題があった時に駆けつけられない。という意味でいうと、なかなか他の先生の授業を見に行くという事がしんどくなっています。今、まだ3学年ありますが非常に厳しい。この後、もっと厳しくなっていく。暗い話になっていきます。

私が子どもの数が減ってきて一番影響が大きいと思ったのは逃げる場所がない事です。

高校のクラス分けは割と成績順でします。絶対そうかという、そうではないです。

小中学校は、課題のある生徒と一緒にならないように不適切かもしれないけど、分けて行ってクラスを作っていく。その子が成長できるようなクラスに人を集めて。クラスがある程度

あればいいけど、本当に少なくなってきたらどうしようもない。という意味で、なかなか逃げるのがしんどいかなと思います。

それからもう一つは、部活動です。

部活動の選択肢は、高校は少なくはないです。うちは、少なくはないですが子どもの数が少ないので成立しないです。要は、チームプレーするとなったら野球であれば、9人が必要です。9人が集まらない。ということで教育庁は、近い学校と合同でっていうふうなことも提案していますが、現実としては、なかなか難しいです。できるとしても自転車で移動できる範囲の話です。そんなにたくさんはないです。選択肢はあるけれども成立はしない。野球部はありますが5人しか集まっていないので試合はできない。そんなクラブが沢山、出てきています。いずれそういうクラブは、なくなっていくと思います。悲しい事です。そういう意味では、ある程度人数は欲しいかなと思います。

学習面では、選択科目が沢山ある学校に行っていたことがあります。生徒に自由に授業を選ばせます。そしたら、7クラスぐらいの規模が普通です。7クラスぐらいの規模の学校で、例えば20個ぐらい授業を用意したらどうなるか。もちろん取らない授業も出てきますね。余りにも少ないと先生も当てにくいから、そういうのを削っていったとしたら、大体、クラス数の2倍ぐらいでした。つまり、7クラスあれば14クラスぐらいの授業は展開できます。教員の配置もそれなら可能でした。ただ、それもある程度の教員とか子どもの数がいないと準備ができません。そういう意味でいうとある程度のクラス数、或いは子どもの数がいた方が高校については、いいかなと思います。

それからもう一つ芸術関係の部分ですね。大体高校は、音楽か美術か書道か選択をします。選択の多いところは、ここに工芸を入れます。そうすると何クラスぐらいが適切か。各学年のクラスです。そしたら、算出すると大体7クラスです。7クラスぐらいあれば、音楽、美術、書道、工芸と全部を拾うことができます。ある程度の数があることによって、色んなことが事できるのは間違いないです。ついでに言うと私工業高校に行っていたことがあります。工業高校は、芸術は、一つしかないです。美術でした。音楽とか書道とか開設してないのですが、それはそれで意味があって、ものづくりという観点で美術が一番いいやろうという事で美術でした。特殊なケースですけど、ある程度の数があることによって、いろんなことができるっていう事は間違いないです。

小さくてもいいのになという気はしています。

《坂本会長》

ありがとうございました。

あの保護者の側から見たら、小中のことを考える会なんです、その次の進路のこともこうやって伺えるのは、非常にいいと思います。ただ共通した問題と発達段階を考えた時の問題というのは整理をする必要があるのかなというふうに思いました。

私も高校の時、公式野球部でした。新聞を見たら連合チームと言って、最初は2校の連合ぐ

らいでした。今は、2校3校にわたって学校名が書かれていて、君は誰って言いながら、キャッチボールするのかみたいところに、そのスポーツの特性を考えたら極めて違和感というか本当にそれで何か自分がやってきたっていう気持ちになれるのかなっていうようなものを見つつ、今の子ども達は大変だなと感じています。

ただ、現実問題ですけど、例えば、小中学校で言うと40年前、大阪府の小中学生って140万人ぐらいいてました。7、8年前に半分になっています。70万人です。この70万という数字をなぜ今でも覚えているかっていうと、大阪府の教育庁の小中学校課に勤めていた時に予算を取りに行くんですよ。そしたら子どもがこれだけいるから、これだけになりますっていう試算をするわけです。そして、その時に70万っていう数字がベースにあります。ところが、この前ちょっとこんな話をしていたら、今、試算するときには63万人ですよ。この減り方と少子化というか出生率の話を聞いたら、ほんまに待ったなしのことをこの羽曳野市という町も我が事として考えていかなあかんというふうな印象を強く持ちました。お待たせしました池上先生お願いしていいですか。

《池上委員》

教育大の池上です。よろしくお願いします。

私は、最初の自己紹介の時に申し上げたかどうか分からないのですが、もともと小学校の教員をしていて、教育委員会に途中14年ほど、府の教育委員会の方に勤めた後、最後3年間、校長して終わったっていうそういう経歴の持ち主なんですけれども、お話を聞いていて、どちらかというと少子化していく中での課題というか、そういうお話が多かったように思うんですけれども、ちょっと自分の立場を離れて申し訳ないですが、先ほど部活動の話で部活動を担う教員が減ってきていることとか、そういうお話があって、なかなか部活動の意義が難しい、地域に移行していこうという大きな流れがあるという話でしたが、大学生と話をしているとやはり、その部活動の経験がここまで来るのに大きな原動力になっていた。自分が教員になって、部活動の指導もしたい。というふうに考えている学生も実は一定数います。そういった学生たちが、今どんな形でスキムをつくろうか考えているみたいで、私の大学だけではなくて、他の大学の学生なんかも自分たちが人材バンクみたいなものを立ち上げて、その学校に入っていくみたいなことはできないかというようなことを言っていました。

その専門の部活動指導では、さっきもありますようにサッカーはやったことあるけれども野球部の指導はできない。そのときに専門的なスキムを持っている学生なんかが来てくれたら、ちょっと助けになるみたいな、そういったニーズを受けてそういった事も出来ないかな。

ただ、これをする時に責任問題とか安全上の問題が起こった時に誰が責任を取るのか。といった問題はあるんだけど、実は一定そういった学生も居てるので、そうした形で部活動をサポートするというふうなことはできるし、実際に今、多くの学生が、うちの教育大の学生もそうですけれども、四天王寺大学でもいろんな大学の学生が学校現場にボランティア

として入って、本当にもう先生方のものすごい大きな力になっているというような話は、学校に行っても聞きます。そういう意味では、今のクラブ活動だけではなくて、様々な形で例えば大学生なんかでもサポートして、そしてサポーターとして関わっていけるという風なことを考えると学校運営に関わってはチーム学校というふうなことが言われていて、もう前にいらっしゃる保護者の方々、私なんかよりもずっとお若いので学校の中に教員だけではなくて、いろんな方々が入ってきている姿をご覧になっていると思います。スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーをはじめ、他に沢山の方々が関わっている状況があるので、本当にそういった意味では、みんなでこの子ども達の成長、子育てをサポートしていくんやという流れをやっぱり作っていかないと、今の少子化は止まらないと思います。この前、少子化のニュースをNHKで見っていた時にある市町村では、もう20年前ぐらいから子どもの医療を無償でずっと続けており、その地域というか行政区だけは、出生率が1.8倍となっているというようなこともありましたが、それは、一つの医療費の無償という事も特徴と言っていました、社会全体で子どもを支えていくという流れをこの際、やっぱり作っていく。そのぎりぎりのところに来ているのだなと考えると、さっきの学生ボランティアもそうですけれど、いろんな形で子ども達の育ちを支えていくような流れを作っていかなあかんと思います。

クラブ活動の話に戻りますが、クラブ活動で言うと最終的にプロみたいなことを考えて、三角形のトップの部分がプロで、その一番下のところに小中学校のクラブ活動があるけれども、そこまでの力を別につけたいわけじゃないけれども、やっぱりこう緩くっていうか、体を動かしたり活動したいっていうふうな人達はいてるし、それを大学なんかでも、クラブだけではなく、同好会とかサークルみたいのが実は増えていて、そういう何か生涯スポーツみたいなものを支えるような大学の取り組みも始まったりしているので、そういった流れの中にもね、地域の人と連携しながらやっていく流れというのは、作れるのではと考えていました。

あとは、どうしても子育てを孤立化させずに、応援するという流れなんかも含めて繋がりという言葉、自分の中では浮かびますが外国にルーツのある方が、どんどん入って来る中で、これまでの繋がりとは違う繋がり、そうしたこともやっぱり見つめ直していくことが大事なのかなあと思います。阿吽の呼吸とか、もう別に言葉出さなくてもわかるやろうなことでは、きっといかなことがたくさんこれから出てくると思いますが、そういう意味では、これまでとは違う繋がりの中で子ども達を育てていくっていうような、こんな繋がりっていうふうなことも子どもを中心に、こども基本法も1年経つということで、そういった状況の中でやっぱり子どもをもう一回真ん中に据えて、みんなはどう支えていくのかということはこの期に考えていけるチャンスじゃないかなっていうことは凄く感じているところです。

すいません。なんかざっくりした話をしてしましまして。以上です。

《坂本会長》

ありがとうございました。

やっぱり、まちづくりを絶対に切り離したらあかんという事ですね。

そのあたり、お金の問題なのか。何を重視するかバランスの問題なのか。私たちは、ここからまだ 1 年かけて考えながら、羽曳野市のこれからを考えていけばいいなと思っております。

さて、教員出身者の方に発言をずっとお願いしていましたが視点を変えて、別の専門的な観点から西堀委員いかがですか。

《西堀委員》

大阪工業大学の西堀です。

私は、以前も紹介させていただきましたが、工学部土木の立場から都市計画や交通計画を専門に教育している者で、そういった立場からのお話をしたいと思います。まず、その前に私自身も父親として中学 2 年生の息子がおります。1 学年 4 クラスの学校に通っています。

息子とは、あまり話す機会がないのですが、楽しそうに学校へは行っています。中学校の隣に高校がありますが、その高校が来年度に別の高校と統合されて、その高校は、残りますが名前が変わってしまいます。統合のもう一つの学校は廃校になるというような変化もあるような地域でございます。そういったことがあって今回の羽曳野市さんの問題についても一生懸命考えていきたいなと思っています。

話を戻しまして、土木工学、都市計画の観点からという話になりますが、基本的な都市計画の考え方でいきますと、いろいろな考え方はありますが、一つの考え方として効率的な施設配置と言う考え方があります。経済学的に最も低いコストで最大のサービスを提供できるような物ってどういう施設か、この場合で言うと学校ということになります。そういった考え方が一つあります。そこは、データを使って数値計算して出す方法があります。ですが、お話を聞いている中で私もすごく、教育の専門ではないという事もありますし、現場の事も良く分かってなかった事もあり、本当に考えながら聞かせていただきました。その中で、凄く心に残っていたのが子どもの事を一番に考えなあかんという先生や会長の話とか、あと冒頭に新田委員からありました、学校っていうのは子どもの成長の場であるという事とか、地域コミュニティの連携の場でもあるといったことを踏まえて考えますと、やはり先ほど私が申し上げた経済学的な効率的な施設配置というデータや計算で出てくるような答えでは、やっぱり駄目なのだろうというふうに私は考えております。

とはいえ、いろんな問題が指摘されてきた中で、どうやって対処していくのかということ、この場で議論していくことになるんだと思いますが、聞いている中で、本当にいろんな児童の方が置かれている状況の問題ですとか、教員の皆さんが置かれている状況とか、施設の維持管理の例とか、町を含めての話ですとか、保護者、いろんな問題がある中で、それを一旦なんて言いましょうか、棚卸しじゃないんですけども、どういうふうにして、どういう状態

が理想的なのか。という所をまずは、この場の共通認識として持てると話をしていきやすいのかなと思って聞いておりました。例えば、今かなり学校の現場でいろんな苦勞を抱えておられるというふうに私は認識をしたんですけれども、そういった学校で抱えるべき問題もあれば、そうではない問題もあると思います。例えば、教育委員会さんからの立場で対応すべき問題があるようにも聞こえましたし、学校がやらないといけないこともあるでしょうし、或いは保護者の方に一部任せてもいいってということもあるのかもしれない。そういったところの今こういう状況にある中での最適な役割分担というのを考えるのも一つの進め方かなと思って聞いておりました。これはもう都市計画とかっていうのとは、ちょっと離れておりますけれども一つそういった認識でいいと思います。

あと、そういった中でやっぱり先ほども言いました、子どもの成長であるとか子どもの事を考えるという事を念頭に置いて、選択肢として、施設配置を考えるってということもあるかもしれないし、或いは今の施設を残した状態で運用を変えていくという事もあるかもしれない。そのあたりをこの場で来年度の提言に向けて議論できればいいのかなと思っています。その中で、特にこの貴重な資料を出していただいているのですが、こういった形を通じて出てきますと、いろんなことが見えてくるのかなと思います。これで、一つの事実としてこういう状況であるという事を私も認識が出来たわけですが、これは、一つの参考と捉えるべきだと思いますので、これが全てではないというふうに思うかどうかかなと思っています。

1人あたりの経費ということもありますけれども、これは人数が少なければそうになってしまう、当然でもありますので、あそこをどうするというのではなくて、やはり人数とか規模によって受けられる教育が変わってくるというのは、私も良いことではないと思いますので、そこをどういった形で担保していくのか。縮小施設を残した上で、その教育の機会なんかが減らないやり方でどういったことを考えられるのか。そういった方向の議論ができるといいのかなと思います。取り留めもない話ですが、一生懸命やります。

《坂本会長》

ありがとうございました。

父親として、かつ、ご専門の立場でこの議論を踏まえながら、次年度に向けての方向性とか、委員の方からもここで共通認識をちゃんとしてというあたり、これ、次回に向けての大きなテーマというか、宿題やろうなと思うところです。ありがとうございました。

ここまで、もう1時間半近く、いろんなご意見を熱心に出していただいて本当にうれしく思っています。皆さんのご意見ご感想など聞いて副会長いかがですか。

《清水副会長》

ありがとうございます。

本当にいろいろな話を聞かせていただいて、私自身の経験と西堀先生もご自身のことをお

話になったので、私も大学院生と大学生の子どもがおりますので、かなり大きくなっています。娘と息子なんですが、彼、彼女たちの成長を見ながら、自身もPTAに関わったりとかしてる中で、いろいろな課題があるなというのは非常に感じてきたところです。子ども達の小学校時代は、2人とも1学年4クラスで、人数が増えた時期でもありまして、プレハブの校舎が運動場にできるというような学校でした。子ども達は、小規模というのはあまり経験がないかなと思いますが、私自身は、生まれたのは関東の方なんですけど、父親が転勤族でして西宮の方の小学校に入りました。入った時は、10クラスでした。そこから大阪市内に引っ越しまして、私が入った小学校は2クラスでした。10クラスの小学校から2クラスの小学校に3年生である程度もう周りが見える年になっていたので結構、衝撃的な事だったなというふうに自分では思いました。2クラスの小規模校に来た時、ただ非常にみんなが仲良く、もう皆さん幼稚園時代から知ってる子ども達がそのまま上がってきてるとクラスは違えども、皆、本当にあの子はこんな子やで何々ちゃんはこんな子やで。そういう環境がなれるに従って私自身はいいなというふうに感じていました。小規模校は、いろいろ課題があるというような今日のお話だったかと思いますが、もう私としては、両校長先生がお話になったメリットのところ、そのところにもっと目を向けてもいいのかなというふうには感じました。自身が小学校に入ったとき10クラスということで特に小さい学年、小さな子どもでしたので、なんか10クラスもあってしまうと、逆にクラス間が非常に独立するんですね、うちのクラスに入ってこんといて、みたいなことがあったりですとか知らないんですよ。クラスが多いことが、本当にそれがメリットになるのかということに関しては、ちょっと懐疑的なところもあったりしております。

そういう中で、専門といたしましては都市計画という分野が専門になりまして、土地利用であったりですとか建築がベースにありますので、それもどちらかというと物理的なところが専門なんですけどもやはり近年まちづくりの中では、コミュニティというところが非常に重要になってきておりますので、色んな所でのまちづくり協議会の立ち上げであったりですとか、コミュニティ形成という所も専門にさせていただいています。そのような見地からではないかもしれませんが、小規模校がおそらくこの審議会の中では対策が必要のところかと思っています。

児童数を増やすにはどうしたらいいんだろうかというのと、手っ取り早いのは住宅供給していただいて大規模マンションをポンポンと建てるとある程度一時は、増えるのかなと思いますけども、おそらくこれは現実的ではありませんし、非常に短期間の効果しか見込めないのかなという所であまり投資としての政策として私はお勧めできないなというところがあります。という意味ではお金の問題かとなってくると、政策というのは非常に重要になって来るかと思うので、教育委員会という枠組みだけではなく、市としてどうしていくのか。子ども政策という所でしっかり考えていただかなくてはいけないのかなというふうにも思っております。

先ほどのこれからの共通認識という中で、考えていく中でこの審議会のちょっと枠を超え

でも、政策としてこういったことが必要なんだというような声を上げていくということも必要かなと感じています。先ほどのご指摘もありましたお金の問題ではないという、私も思っているところでして、国ももう少子化政策を待たないと首相が言うならば、もっとお金を付けろよ、というところが本当に切実かなと思いますのでやはり、これを維持していくにはこれだけ必要なんだから下さいっていうことを、府であつたり国あたりにもう両方が出すぐらいなことでもいいのではないかなと思っていて、お金がどうこうというところで子どもが振り回されてしまうのは、何かちょっと残念だなあというところがあります。そういったところも将来的にはもちろん、長いスパンになるかもしれませんが、考えていけたらいいのかなと思っております。

とはいえ目の前の課題をどう考えていくのか、というところかと思います。

都市計画の分野から考えさせていただきますと、小学校区というのは、地域を作っていく中での一番小さな単位、必要な単位だというふうに考えられておりますので、小学校区を作り変える、改変するというのは、まちづくりの中では非常に大きな課題だというふうに捉えております。ただ、よそでもそうですが人数の問題、様々な問題で統廃合というのは、やはり、起こり得ることだとは思いますが、そうなった時に元々の小学校区のコミュニティというものをどんなふうに守っていくのか。廃校利用もそうですが、小学校区がたとえ統合されたとしても地元の意識というのは、もともとの地域で結構、醸成されているものだと思いますので、その辺りは非常に大きいのかなと思っております。

この前、現場を見せて頂いたときに羽曳野市は、小学校が出来て150周年、この学校もこの学校も150周年というお話を聞いて、すごいなと思いました。小学校のあった歴史というのをしっかりと踏まえて、考えていかないといけないんじゃないかと思っておりますので、数の理論だけではなく、やっぱり地域への愛着思いというものと、そのあたりをしっかりと踏まえていけるような、教育改革というものを考えていただけたら、考えていきたいというふうにあと1年ですね、思っております。

じゃあ、具体的に何かできるのかなと思っていろんな先生のお話を伺っていましたが、まず、一つ目としては、先ほどもご指摘のあったやはり共通認識というか、今後はどうしていきたいのかというのは、大きなやはりビジョンというものが、必要ではないかなと思います。目の先のちょっと減っているからどうしよう、この先もこのペースでいくかもしれないというのはもちろんありますが、そうはいっても10・20年の間に何があるかわからない。大きな目的は、子どもが一番ということで、この子どもが一番のために一体何ができるのか具体的なところとして考えていく必要があるのかなあと思っていく中で、非常に私の今の短い時間でのご意見を聞いた中で浅い考えかもしれませんが、やはり学校間の交流、広域連携みたいなことはできないのかしらと、これは自治会の問題でもあるんですけども、今自治会連合会であつたり、まちづくり協議会ができる時に複数の自治会が連携して作ったりしています。そういった形で、学校という単位は残しますが、小学校の中での何かの連携というものができ、先生方の交流もそうかもしれませんが専門の先生は、いくつかの学校を回る

みたいな。すいません。全然、教育のシステムがわかってないので、素人考えで申し訳ないのですが、何かそういうことが出来ないのかと感じました。先生方へのマンパワーの支援は必要だろうと感じました。今までの教育って言ったら私たちから見ても非常に何か尊いものといえますか、聖域というか、冒してはいけないみたいなところがあったんですけれども、もう少しそのあたりボランティアであったり、外の人を受け入れるということを、もっともってお考えいただいてもいいのかなと思いました。

安田委員からのプールの問題ですね。よそでも聞いたことがあったんですけど、どこか忘れましたが民間施設でスポーツクラブのプールを使っている学校があるというようなことを聞いたことがあります。なので、人間もボランティアであったり、民間の活用もそうなんですけども施設という意味でも民間の施設を活用していくということも、考えていくそういった枠組みをどんどん広げていけば、何かいろんなことは打破できていくのかなあというふうに考えましたので、またこの辺りこの先皆さんといろいろな意見を出していけたら、より良いこの改革ということに向かっていけたらなというふうに考えております。すいません。段々になりましたけど。

《坂本会長》

ありがとうございます。ちょっといいかつこします。狙い通り意見がいっぱい出て、真逆も出て嬉しいっていう感じで、これはぜひ今年度の成果っていうか顔合わせの3回目になり、遠足も一緒に行きそれぞれの見地から、そして加えて多くの方が我が事といえますか、自分が1人の親としての経験などからの意見を出していただけました。そしてやはり、お金のことだけ考えたらいい、何かだけ考えていたらいいっていうんじゃない。本当に大きなちょっと夢みたいなことも持っておきたいよね。それがきっと子どものためになるのかなっていうふうな印象を、もう皆さんのお話を伺いながら感じた次第です。

でも残り時間が僅かになったんですけども今日は、委員をしてくださっている2人の校長先生からスタートしてご意見をいただいて、いろんなことをそれぞれの立場でそして専門で考えてきたんですけども、事務局の方がちょっと用意してくださってるものがありまして、実は、国は国でこの問題についてどう考えているかっていうことを若干古いんですけども取りまとめたものがあります。今日は、もうこれについて読み込むということはしませんが、これは何なのかっていうあたりちょっと事務局の方から簡単にご説明お願いします。

《黒木理事》

事務局の黒木です。よろしくお願いします。今日は、本当にありがとうございます。

文部科学省が平成27年に出した学校規模の適正化に関する手引きが、今お手元にあるものです。先ほども言いましたようにこの少子化については、もう全国的な課題として文部科学省の方もこれは、もうすごく課題と捉えてまして、各市町村がおそらく今後、こういった話し合いをして行くだらうということを想定されて、いろんな事例を法令も交えながら書

かれた資料になります。ページ数が多いので、簡単にどこにどんなことが書かれているかだけ話します。6 ページには、学校の規模の基準、先ほど坂本会長の方から仰っていただいた、その基準ですね。それとその学校規模から考える諸問題。文部科学省はこういうふう考えてますよってということが書かれております。続いて 15 ページには、校区が広いので、今後文部科学省の方が通学距離の考え方についてもここで触れられております。続いて 18 ページ。こちらには、統合を考える場合には留意することの例が様々書かれています。かなり飛びますけれども 33 ページには、小規模校を先ほど清水先生からもありましたけど、小学校、小規模校を存続させる場合の考え方とかそういった考え方も書かれています。この手引きは、あくまで全国的な様々な事例を基に書かれている資料ですので、やはり本市について、頭の部分っていうのを参考にしながら、本市は本市の考え方でやっていくべきかなと思いますので参考でお配りさせていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

《坂本会長》

ありがとうございます。平成 27 年のものですよね。

議論されたのが、それまでの 1・2 年前ということだと思いますので、最新の情報でもないんですけど、たぶん、この手の問題を考えるときって、みんな同じ課題にドーンとぶち当たって、うちはどうしようかっていう様なことを考えてるんだと思います。

加えて言うなら、他市でこういった会議をした時の情報なんですけども、教育の専門家でない学識の方が、今年の 1 月 1 日の震災とそのあとの地元の学校の役割っていうのを考えたっていうか、非常にショックを受けて考え直したときにこの視点もいるよね、っていうことをお話されてたのが私は印象に残っています。で、今年度これが最終回ということで事前の議論になるかと思うんですけども事務局におかれましては、今日の意見というか様々なご感想を含めたものを整理していただいて、その上で、来年度 3 回の予定ということですので、1 回目は、何を目的に。2 回目は、何を目的に。そして 3 回目は、仕上げにっていうあたりのところ、もう一回戻りますけど、羽曳野市としてのまちづくりと子どもを一番大事にした子育てしやすい、子どもが毎日元気に帰ってくるようなまちづくりっていうような辺りを、大きい一番大事なことでっていう共通認識のもとで、案を作っていたらありがたいと思います。

ただ、それをするにはですね、具体的に羽曳野市を特によく知ってくださっている方なんですけど、何か切り口はわかっても、この側面でとかこの見方でとか、ちょっと物理的なことも含めて、こういう点を押さえた上で計画っていうかイメージして欲しいっていうことがあれば、ここでちょっと事務局に宿題という形でのご意見になるんですけどもいかがですか。

《東委員》

冒頭に黒木理事からの説明がありましたが、東と西という説明があつたと思いますが、そこ

のところと重複しますが、やはり西の地域と東の地域で子どもの数は減り方とか校区の広さであるとか、特徴がやはり分かれているのかなという事を私は感じています。今後の議論の中で、同じ地域であっても状況が違うのでそういったところも加味しながらちょっと地域毎に視点を変えて考えていくっていうところも、あればいいのかなって思うのは思っておりますのでよろしくお願いします。

《坂本会長》

ありがとうございます。

他に何か、この視点とかこれっていうのがあればお願いできますか。

《西堀委員》

この資料、ご準備いただきありがとうございます。

資料を拝見していて感じたことですが最後のページに児童数を整理していただいて、これ見るとやっぱり各校の児童数の変化、今後は、伸びる事はなかなか難しいのかなと感じています。その中でも羽曳が丘小学校は、急速に減っているという状況もありますので、今日お話ししたのは、今現在の問題点だと思いますが今後 5 年後 10 年後のことを考えたときに、もっとひどい状況が起きてくることも考えられますので、そういった観点からの議論も必要かなと感じています。

《坂本会長》

ありがとうございました。

これは、特に人口問題を考えるにあたって、将来のことを考えるのに将来の数字がなかなか、ただこれも同様に他市の審議会が出たんですけど、この人口推計って、一体どうやって計算してるのみたいな話になって。ただ一定の情報は持っておかないといけないかなと思います。そこは、また宿題ということによろしいです。清水副会長、いかがですか。

《清水副会長》

次回の会議に向けてですね。

そうですね。小学校の設立年数とかリストは、前に頂いていましたか。

《坂本会長》

もしかしたら 1 回目の時に。

《清水副会長》

なんかちょっとそのあたりもう一度振り返っておきたいような気もいたしました。

おそらく具体的な議論では、ちょっとこのままの数というので答申ということは難しいの

かなと思うと、来年度は、具体的にどこをどうしようという話が、避けては通れないところかと思います。その時にどんなふうを考えていったらいいのかというところでは、ちょっと今見ていただいた歴史的な変遷であったりですとか、地域性みたいなところは、ぜひ議論させていただきたいなと思います。

《坂本会長》

ありがとうございます。

事務局の方には、たくさんの宿題を出して、宿題出し逃げ状態に近づいてきていますが、ぜひ事務局内でも自分たちの学校をどうするかというあたりを十分に意見戦わせていただいて、資料をまたご提示いただけたらと思います。

進行不行き届きで持ち時間というか、規定の時間になってるんですけども、今日は本当にいろんな意味で温かいご意見と厳しいご意見を出していただけたことが本当に有意義だったなと思っております。

次回に向けて様々なこれやりたいな、これやっていきたいなとか。これ大事にしたいなとかが出てきた会議だったと思いますので、今日はねらいについては、収穫があったと思います。それでは、マイクを事務局の方にお返ししたいと思いますのでよろしくお願いします。

《司会》

坂本会長議事進行ありがとうございました。

委員の皆様におかれましても様々なご意見ありがとうございます。それでは、最後になりますがここで事務連絡をいたします。本年度の教育改革審議会は、この第3回で今年度は最後となっております。第4回以降の話になりますが、年度が明けて4月後半から5月に第4回、第5回を8月に開催できればというふうに考えております。皆さまの予定がそろわない場合につきましては、運営上、会長様の日程に合わせて進めていきたいと思っております。

どうかご了承ください。

それでは以上をもちまして、令和5年度第3回羽曳野市教育改革審議会をお開きとさせていただきます。皆様どうもありがとうございました。